

〔論 説〕

産業大学の誕生と時代背景

——「産学一如」前史小考——

木 元 富 夫

〔要 旨〕

九州商科大学を前身として、九州産業大学は1963年に誕生している。半世紀たった現在、大学を取り巻く環境は大きく変貌し、本学も教学体制の再考、再編を余儀なくされている。しかしいつの時代にも教育の拠り所となるのは創業者或いは大学の建学理念である。本学以後いくつかの産業大学が誕生しているが、それらは如何なる理念のもとに設立されたのか。本学の場合それは「産学一如」であるが、このユニークな理念に基づく産業大学の誕生を、産業史的背景の中で考えてみた。なお紙幅の都合で、「産学一如」理念の検討は別稿とした。

1 産業大学随感

■「産業」大学雑感

私事から始めて恐縮するが、筆者は本学＝九州産業大学に勤務して三十年になる。凡才が辛くも健康にだけは恵まれて、徒に長らく居座っただけのことだが、定年を前にして我が大学の来し方行く末に少しく思いを馳せたい心持ちにある。まず手始めに顧みたいものとして、本学教員になって間もない頃（1987年）、大学広報紙*1に次のような雑文を学生に供したことがある。

「産業」大学雑感 —— 私は経営学部で産業論を担当しているが、この経営「学」また産業「論」について、我が事ながらいまだに自信のある体系を構想できないでいる。ちなみに、英米には「経営学」ということばも考え方もないのだと聞かされて*2、学生諸君は信じられるだろうか。しかし、その吟味は別の機会にまわして、このたびは「産業」についての雑感をつづってみよう。

実は私は本学勤務二年目で、九産大の歴史はよく知らなかった。先日思い立って図書館で調べると『学園十五年史』（昭和43年発行）を見つけることができた。初期の写真を見ていて、昔、漢文で習った「滄桑の変」ということばがふと思い浮かんだりして感懐を覚

えたが、おもしろいのは本学は初めから産業大学を名乗っていたのではなかったということだ。

学園前史は省略して、昭和35年に本学は単科の「九州商科大学」としてスタートした。早くも3年後には工学部を増設するに至ったが、この時に「発展的改称」が行なわれて「九州産業大学」となった次第である。

産業大学——実に重宝な名称だ。およそ産業大学と称しておいて、将来、収容不都合な学部が出現することはまずあるまい。アイデア賞ものといえよう。事実、創立者、中村治四郎学長には先見の明があったといわねばならない。数年後には京都と大阪に相次いで産業大学が設立され、いずれも発展していったことにもそれは例証されている。

ところで、40年前後に産大の設立が続いたことは何を物語るのだろうか。昭和40年といえれば1965年、いわゆる「黄金の60年代」のピークである。日本経済は技術革新（実は技術導入、学長によれば第二次産業革命）に基づく重化学工業化路線をひた走り、経済大国化しつつあった。大学教育もこの工業化の新たな局面に（フリクションを伴いながら）新たに対応しなければならなかった。この外部的な産業社会的需要に対して、内部の先輩学生諸君並びに教職員が努力と精励でもってよくこたえてきたことが、今日の産大をあらしめたのであろう。

なお、「十五年史」によると、改称当時、学長は「日本に唯一つの特色ある校名」と述べたようであり、また、編集後記には「日本では最初の名称」とされているが、これは得意の余りつい筆が滑ったのだろうか。というのは、産業大学の称号は決して空前のものではなかったからである。

今をときめく一橋大学は、かつて東京商科大学改め東京産業大学を名乗ったことがある、いや名乗らされたことがあった。本学の場合とは事情が違い、こちらは戦時中の軽薄な商科＝商業蔑視のあおりを受けて改名を余儀なくされたのであるが^{*3}、図らずもこれら新旧二つの改称事例は、我々に「商科」と「産業」の微妙な緊張関係を示唆している。

すなわち産業は、商科を否定すると同時に包摂するという両面を止揚した概念なのである。本来、産業概念に最もよくなじむのは工業ないし工科であり、これは英語インダストリーを思い浮かべれば直ちに納得されよう。……

商科、工科ときて更に筆を走らせると私もつまづきそうなのでこの辺で止めるが、これら個別産業の関連や組み合わせは産業構造といわれる。折しも発表された「経済白書」が「進む構造転換と今後の課題」をテーマとしているように、産業社会は歴史的な転換期にあるといわれている。当然、本学の編成や内容も、これまで以上に時代の要求にこたえて

いかねばならないだろうが、この先の「ポスト・インダストリアル」な雑談は、研究室で学生諸君とコーヒーでも飲みながら続けることにしよう。(以上、再録)

■九州産業大学の原点「産学一如」

雑文を書いた1987年という昭和末期であるが、いわゆるバブル最盛期でもあった。学校教育法（1947年）や産業教育振興法（1951年）のもとで教育界も余禄に与り、どの大学も掛け持ち受験による受験生バブルに沸いていた。

しかしバブルが崩壊してからは、教育界も変化を余儀なくされている。90年代に入ってから、高校では普通科と職業科とは別に「総合学科」が制度化され、そこでは「産業社会と人間」が履修科目とされた。職業教育コースへの誘導が図られた訳だが、しかし依然として普通科の生徒が高校生全体の7割以上を占め、「日本の後期中等教育における職業教育は世界のどの国より軽視されるという由々しい事態」*4は改善されていない。逆に言えば、高校普通科進学と大学進学が必要以上になされていると言うことだが、それも少子化のため今や大学は全入時代*5となっている。

これまた90年代の大学設置基準の大綱化・自由化によって、競争的に大学は種々の改革を迫られ今に至っているが、人事においても特任扱いの非正規雇用教員が増えている。研究室でのんびりコーヒーでも、とは行かなくなっているのだ。雑感を抱懐してから三十年、かくて大学の環境は大きく変容したが、こうした変化に九産大は如何に対応したか。

当時本学は商学部・工学部・芸術学部・経営学部の4学部であったが、その後、経済学部・国際文化学部・情報科学部を加えて益々総合大学の体裁を整えていった。しかし、その拡大策は、新自由主義的風潮の中で、長期的少子化＝受験生減少という環境大変化の中に強行されたもので、無理や歪みも内包されていた。それらの問題点は、教学においても経営においても、もはや放置できない段階にあると思われる。

日本経済にかつてのような高度成長がありえないように、大学も発展期は疾うに過ぎ、今やこれまでの量的拡大路線を清算し、質的回復及び向上を目指すべき時期にある。賢明なる学園トップはそんなことは重々承知の上で、制度の改善を進め、組織の再編・革新を構想していることだろう。

組織の維持・発展を大前提として、改革に当たって大事なことは何のための改革であるかを忘れぬことと、初心、原点を再認識することではないか。本学の原点は、創立者が「日本に唯一の特色ある校名」と自負した「産業」大学の設立理念そのものである。その後、産業大学も各地に増え、名称の天下無双の有り難みは減ったが、そうであればなおさら産業大学一番手

としての矜持をもって新時代を切り開くことが期待される。さて九州産業大学の理想は「産学一如」とされているが、その検討に入る前に、産業大学と称する全国各地の大学が、夫々どのような建学理念によって誕生しているのか、一瞥しておきたい。

2 産業大学の建学理念

■産業と工業

産業は工業と同類概念である。産業化も工業化も共に英語では industrialization であることから明らかである*6。しかし産業は工業（製造業）の上位概念でもあることから、全国の大学の名称を見ると、理工系の大学は産業を冠することは避け、もっぱら専門性を強調して工業大学、工科大学 institute of technology を名乗る傾向が窺われる*7。産業大学の名称は、文系学部も有する総合大学に多いようである。では現在ずばり「産業大学」を名乗る大学は、全国にどれほどあって、又その建学の精神はどういうものであったか。各大学のホームページによって、開学の順に見ていこう*8。「産業」がどう英語表記されているかを見るため、名称の後に英字を付ける。

■1960年代における産業大学の誕生と建学理念

*1963年、九州産業大学 Kyushu Sangyo University

本学については後ほど詳しく扱うが、行論上ここで少く触れておく。前述したように、1960年に創立された九州商科大学が、3年後の63年に工学部を増設するに際して九州産業大学に改称したもので、戦後最初の産業大学である。戦中期の東京産業大学は、当時の政府から、「商」なる名辞を排除するという、ただそれだけの理由で、無理やり「産業」をこじつけられた非学術的かつ無概念的な名称であったから論外であり、教育的学問的使用例としては、確かに九州産業大学が日本の産業大学第1号と言ってもよい。

「建学の理想：産学一如 建学の理念：市民的自覚と中道精神の振興 実践的な学風の確立」とある。産学一如とははてさて、理想と理念の関係如何等、興味が持たれるところであるが、これらについては後に改めて考察する。構成学部は前記の通り。

*1965年、京都産業大学 Kyoto Sangyo University

「建学の精神 大学の使命は将来の社会を担って立つ人材の育成」とある。特に産業にこだわった用語は見ないが、九州の次に京都に誕生した産業大学第2号である。

九州・京都・大阪に生まれた産業大学ビッグスリーの中で最も大規模化した大学で、経済学

部・経営学部・法学部・現代社会学部・外国語学部・文化学部・理学部・コンピュータ理工学部・総合生命科学部を擁している。

* 1965年10月、大阪産業大学 Osaka Sangyo University

「『偉大なる平凡人たれ』を建学の精神とする」この第3号産業大学は、第2号から半年遅れで同じ年に誕生している。即ち65年4月に開学した大阪交通大学が、間も無く10月に改名して産業大学となったのである。産業大学ブーム化の兆しがあったのかと思われるが、あに図らんや、その後十年以上産業大学の新設はなかった。ここでも建学精神に特に産業を意識した用語はない。経営学部・経済学部・工学部・人間環境学部・デザイン学部から成る。

■70年代以降の産業大学

* 1978年、産業医科大学 University of Occupational and Environmental Health

「産業医科大学は……学問の教育及び研究を行い、労働環境と健康に関する……学問の振興と人材の育成に寄与することを目的及び使命としています」。これは産業医学（industrial medicine）という特殊な事例になるが、1960年代からの重化学工業化に伴う公害や労災の激化に対応して、北九州市に設立された官有民営的な私立大学である。

* 1979年、産業能率大学 SANNO Institute of Management

科学的管理法を日本に紹介した先駆者の一人上野陽一が戦前に創立した日本産業能率研究所^{*9}と、戦後に設立した産業能率短期大学が母体となって開設された。「建学の精神は、マネジメントの思想と理念をきわめ、これを実践の場に移しうる能力を涵養し、もって全人類に幸福と繁栄をもたらす人材を、育成することにある」。

「法人の基本理念」もあり、「学生教育事業を通じて実践的な知識・スキル・協調性を有し、実行力あるよき社会人を育成し、もって社会に貢献する」。経営学部と情報マネジメント学部から成る。

* 1984年、奈良産業大学 Nara Sangyo University ~2013年

経済学部でスタートし、その後法学部・経営学部・情報学部を加えた産業大学であったが、更に新たな学部を加える形で再編され、2014年に奈良学園大学に改称している

* 1987年、宮崎産業経営大学 Miyazaki Sangyo-keiei University

建学の精神は「師弟同行のもとに実学の精神を尊重する」。解説によれば、「ここに『実学』といわず、敢えて『実学の精神』を謳うのは、学問を通じて人格の向上に努め、豊かな人間性と自在の精神を涵養し、先見性と創造性をもって、今後急速な変化が予想される国際化、情報化社会に的確に対応できる人材の育成を念願しているからである」。

大正時代に設立された高等簿記学校をルーツとし、戦後高校を設立し、大学を開設するに至っている。かつて都城市に増設した経済学部を廃止し、現在は当初の通り法学部と経営学部から成る。なお「産業経営」とは必ずしも明快な概念ではないが、名称の英語表記は上記の通り k は小文字である。

*1988年、新潟産業大学 Niigata Sangyo University

「建学の精神 創設者……は『戦後日本の再建・発展と平和で幸福な社会の建設は、一にかかって若い人材の育成に在り』との使命感から本学を建学し、その教育理念を『主体的自我の確立』としました」。

1947年に設立された柏崎専門学校が母体である。柏崎は戦前から理化学研究所と関係の深い土地柄であったところに興味を持たれる。創立20年にして2007年本学は、地域に根ざした「コンパクト・ユニバーシティ」への転換を宣言し、経済学部経済経営学科と同文化経済学科の1学部2学科に再編された。建学の精神を踏まえて、「ミッション（本学の使命）」は、「地域社会や企業を主体的に力強く支える人材の育成」と定めている。

これは産業の本義からしても大いに意義ある方向と思うが、地方大学の経営には困難が伴う。「地域と大学双方が抱える課題の解決のため」に近年は「公立大学法人化」*10が模索されているとのことである。

*1992年、愛知産業大学 Aichi Sangyo University

「豊かな知性と誠実な心を持ち 社会に貢献できる人材を育成する」。日本のモノ作りの一大中心地愛知県は岡崎市に誕生した産業大学で、1986年開学の東海産業短期大学が発展したものである。当初造形学部からスタートし、経営学部を加えて今に至っている。

*1994年、静岡産業大学 Shizuoka Sangyo University

本学は、磐田市と学校法人新静岡学園との公私協力方式により開学した。当初から静岡の「県民大学」を標榜し、「人材、知識、情報、アイデアなどの提供」、「新産業の創造への取り組み」を明言するとともに、「静岡県や磐田市、藤枝市の地域社会の発展に寄与できる人材の育成」を目標に掲げている。

建学精神だが、「本学は、母体である静岡学園の建学の精神『孝友三心（服する心、感謝する心、全うする心）』を継承し、次の『理念』と『ミッション』を掲げ、21世紀を担う人材の育成に努める」とあり、それに理念が続き、ミッションが述べられるが、大学紹介が長すぎて焦点が絞り切れていない。学部は磐田キャンパスに経営学部、藤枝キャンパスに情報学部がある。

*2000年、名古屋産業大学 Nagoya Sangyo University

戦後設立されたタイピスト養成所が母体となって女子高校、短大、専門学校が設立され、更

に本学の開学に至ったものである。

「大学の建学の精神は、『職業教育をとおして社会で活躍できる人材の育成』とする」。次に「大学の理念」について、「大学は、『誠実にして創造性に富み、専門的能力を身につけた、産業社会で活躍できる人材を育成する』ことを目的とする」。

学部は環境情報ビジネス学部だけで、単科大学が産業大学と称する数少ない例である。立地は瀬戸市に近い尾張旭市で、ここで名古屋を冠するのは解せないが、「愛知」がすでに登録済みだったためか。ともあれ20世紀最後の年に設立された産業大学で、21世紀になって今に至るまで新たな産業大学は生まれていない。

■建学理念に共通するもの

以上であるが、各地の産業大学の建学精神に共通するものは殆んどない。ことさら「産業」問題を前面に出さず、創立者の教育理念に従って、それこそ一教育機関としての使命に徹することを宣明している場合の方が多いように思われる。「産・学」一如を打ち出した九州産業大学はむしろ例外的である。

あえて共通項めいたものを探すなら、時期的に1960年代からの高度成長を背景に、産業ブーム、理工系ブームに乗って設立された先発3大学が急速に大規模化したのに対し、特殊の産業医科大学は別にして、80年代以降の「自由化」時代の産業大学は中小規模のままに推移したことである。やはり本来の（と言っては語弊があるが）産業大学は1960年代の産業ブームの産物なのである。

3 実は産業大学に先行していた産業高校

■産業ブーム、理工系ブームの時代

1960年代半ばに誕生した3つの先発組産業大学は何れも急速に発展したが、その背景には言うまでもなく産業化＝工業化＝重化学工業化＝高度経済成長があった。産業界の人的資源需要に教育機関が応えたのである。それゆえ九州産業大学の創立者は先見の明を誇り、日本初、日本唯一と豪語したのであったが、学校制度において大学に先立つ高校の世界を見ると、実は当代の高校は既に「産業ブーム」「産業大学ラッシュ」を先取りしており、「産業高校」の名称は特に珍しいものではなくなっていた。そうであれば、産業大学のネーミングは産業高校にヒントを得ただけのことかも知れない。産業教育^{*11}の歴史を考えるのに、この事実を看過してはならないだろう。

正に当時は産業ブームだった。1960年代は「黄金の60年代」ともいわれ、筆者の高校・大学時代に当たる。これまた私的回想になるが、当時は産業や工業や技術という言葉がそれは持て囃されたものであった。筆者が中学を卒業する時、初めて5年制の「国立工業高等専門学校」が全国に12校設置されることになり、時代の先端を行くエリート学校だということで、訳の分からないまま筆者も入れた何人かが、先生に無理やり（兵庫県淡路島の田舎町から受験地の姫路市まで）連れて行かれ、受験させられたことがあった（大変な競争率で、もちろん不合格）。高校を卒業する時も「理工系ブーム」で、メーカー優位、工業優先の社会的・実利的風潮を反映して、成績のいい同級生は大抵が工学部へ進学した*12。筆者の世代の理系コンプレックスはこの時代の産物といってまず間違いない。

■産業大学に先行していた産業高校

産業を極めて工業に特化したのが、1962年にスタートした工業高等専門学校の登場なら、すでに存在していた産業高校にはどういふのがあったか。廃校或いは改名ということもあって、現存する全てとは言えないが、ウェブを調べて眼に留まった限りを以下設立順に示す。なお産業高校に近いものとして実業高校、工業高校、農業高校、食品産業高校等があるが、ここでも便宜上、包括的に産業高等学校と称するものだけを対象とする。

*1948年、岸和田市立産業高校

明治末、大阪府泉南郡岸和田町に創立された実業補習学校が昭和10年に市立商業学校になり、戦後の学制改革で市立産業高校となった。戦後第1号の産業高校にして、現在まで変らぬ校名を維持している点で注目される。校訓は「創造・勤労・協力」と言うが、これまた勤労は産業の本義であることから、正に産業精神を体現した高校と言える。

当初は普通科・商業科・工業科でスタートしたが、その後普通科を廃止し、工業科は紡織科を経てデザイン・システム科になっている。十数年前に情報科を加えて、現在は3学科体制である。繊維産業の盛んだった泉州に位置する、産業高校の代表格と言えよう。因みに校歌には、「産業あすの栄のこの道 われらいざわれらいざ明日の栄を」とある。また校名が英語で Kishiwada City Industrial High School と言うのも珍しい。

*1953年、島根県立益田産業高校～2008年

戦前の農林学校が戦後農林高校となり、一時普通高校に統合されたが、53年に分離して益田産業高校として独立した。益田工業高校と統合し「県内唯一の複合型専門高校」として2008年に校名を益田翔陽高校に変更した。内容からすると産業高校のままで良かったように思われるが、それでは吸収合併の形になってしまうのと、当世風のネーミングにしたということか*13。

* 1956年，尼崎市立産業高校～2013年

第一次世界大戦の最中1916年に大阪市内で開校された住友私立職工養成所が本校の起源である。戦後，兵庫県尼崎市に場所を移して，住友工業高等学校となったが，これが尼崎市立尼崎商業高校と合併し，56年に機械科・電気科・商業科から成る市立尼崎産業高校になった。しかし21世紀になって，市立の普通高校と合併する形の新設高校が作られ，産業高校は閉校した。

* 1959年，兵庫県立相生産業高校

1944年に設立された相生市立相生造船工業学校が，戦後の学制改革で兵庫県立相生工業高校に改組された。それが市立相生高校を統合し，59年に兵庫県立相生産業高校になった。全国4番目^{*14}の産業高校である。造船科に特色があったが，残念ながらこれは86年に廃止された。被服科も2011年に廃止され，現在は機械科・電気科・商業科から成る。校訓は「誠実・創造・努力」。

* 1963年，兵庫県立篠山産業高校

昭和8年設立の多紀実業高等公民学校が，戦後兵庫県立篠山農学校になり，昭和38年に篠山産業高校と改称したものである。当初は機械科・電気科・商業科・生活科が設置されたが，現在は土木科を加えて5学科である。校訓は「自律・協調・不屈・創造」。

* 1963年，鳥取県立倉吉産業高校～2005年

戦前の農業学校が戦後48年に実業高校となり，51年に農業高校になった。その後，農業科を廃止し商業科を新設して63年に改称した。なお，倉吉市では前年の62年に，倉吉東高校の工業科が分離し倉吉工業高校として独立している^{*15}。小さな町に工業高校と産業高校がほぼ同時に設立される，そういう時代だったと言うことで，この年，九州産業大学がスタートしたのもむべなるかな。

* 1967年，九州産業高校（私立）

九州産業大学の附属高校としてそれらしい名称をつけたものだが，学校の創立は少しさかのぼる。61年に日本電波工業高校として開校し^{*16}，64年に南福岡工業高校に改名し，67年に九産大の付属高校となって現校名に改めた。建学の精神は「卓然自立・協力実践・創意工夫」。

■ **産業構造調整期以降に設立された産業高校**

* 1972年，熊本県立大津産業高校～96年

大津高校農業部が1960年に大津農業高校となり，72年に産業高校になった。学科を再編し96年から名称を翔陽高校に変更している。

* 1993年，大分県立宇佐産業科学高校

1901年に開校した宇佐郡立農学校に始まる伝統校であるが、「開校以来、校名変更・学科の
改変等幾多の変遷」を経ている。戦後、1951年に大分県立四日市北高校となった後、2年にし
て四日市農業高校に戻っているのが興味深い。1970年からは農業経営科・農業土木科・電子機
械科・生活デザイン科を有する大分県立宇佐農業高校となったが、93年に工業科を新設して宇
佐産業科学高校（Usa Industrial Science High School）に改名している。その後2008年に高田
高校商業科を統合して、現在は「県下唯一の農業・工業・商業・家庭の4学科〔具体的にはグ
リーン環境科・電子機械科・ビジネス管理科・生活デザイン科〕を有する総合選択性高校です」。
校訓は「誠実・勤勉・奉仕」と、産業を体現するスタンダードなものだが、本校の名称と学科
の変遷振りは、中等職業教育の難しさを物語っている。

* 2003年、山形県立新庄神室産業高校

農業高校と工業高校が統合して設立された。校訓は「志高・創造・自立」。

* 2003年、鳥取県立倉吉総合産業高校

上記倉吉産業高校と倉吉工業高校が統合して設立された。校訓は「自立・創造・共生」。

* 2005年、神奈川県立神奈川総合産業高校

「単位制による全日制の課程」と言うが、設立経緯は不明。

■重化学工業化ブームの中の産業高校

かくして全国各地に産業高校や工業高校が設立されたが、その殆んどが1955年から70年ま
の間に、すなわち高度経済成長の時代に集中している。これは日本の重化学工業化*17に伴う
中級ブルーカラーの需要が急増したからであった。上記は限られた事例であるが、その傾向を
窺うことはできる。すなわち新設産業高校の殆んどが公立であることに気づかされる。自治体
が率先してブルーカラーの大量養成に乗り出している。当時の産業政策が教育に影響を及ぼし
ていたのである。私立の九州産業高校はむしろ例外的である。

理工系ブームとは大学卒業生について言われることであるが、そのブームを先取りする形で
高卒ブルーカラーが求められ、高度成長に伴って大学進学率が上昇し、高卒ブルーカラーが減っ
てきて、結果的に労働力需要が大卒ブルーカラーに移っていったのだろう。そう考えると、産
業高校の後に産業大学が続くのは自然な流れと言える。

なお、1970年代以降の後発組は、それぞれの沿革を見ていると、同じ産業高校と言っても先
発組とはいささか事情が違うように感じる。「産業」なる言葉に自信をなくしてきた時代と
も言おうか、日本経済が産業構造調整に見舞われた時期であったこともあり、高度成長期
のようなモノ作りの自信や使命感が希薄なのだ。整理的に再編されたり、閉校になったり、意味不

明のネーミングになったりしている。それと高学歴化する中で、高校段階での産業教育や実業学校の位置付けが問い直されていると言うこともあるが、これは筆者の手に余る問題で、ここで深入りはできない。

■産業高校から産業大学へ

理工系ブームの最中に発行された大学受験雑誌を覗いてみよう。『高校時代』1959年7月号*18を見ると、「一流大学の工学部には、求人が求職の二十倍も殺到して……いったい、理工科ブームはどのように続いているのか、またどこまで続くのか」として、特集「理工科ブームは続く」が組まれている。

まず「入試・就職からみたブームの実態」では、「給料が倍もちがう」ことが強調される。都立某高校卒業生のクラス会で大卒初任給を調べて分かったが、「現在の初任給は、業種によって二倍以上も開いている」。もちろん理工学部出身が断然トップ（一万八千円、手当てを入ると二万三千円など）で、次が政経学部（一万五千円、まあ一万三千円など）だが、教育学部や文学部の連中は「（九千円なんて）とても恥ずかしくて言えない」とのこと。

ではなぜ理工科系はブームなのか。「人から機械へ」と、産業界の機械化が進んでいるからである。オフィスや工場で文系人間が無用化し、理工科系技術者の必要性が高まっているからである。産業界の要求で、国公立大学は理工系学部を新設したり入学定員を大幅に増やしたりしている。「経済界を代表する日経連の話では、こんご十年ぐらいは理工科ブームはつづく。文科系はあまり希望がもてない、といて」いるので「ブームはまだ続く」と言うのが結論である。

工業高校出身者についても触れている。「大企業は技術の高度化も進んでいようが、それでも、まだまだ高校出の活躍する分野は多い」。東京都立某工業高校の「前年の就職状況を調べてみると……就職希望者数のざっと二倍の求人があったわけだ。それも一流会社からの求人がずいぶん含まれての話だ」。その「初任給は、七千円から一万三千円、平均すると八千七百円で、一万円以上が二十社もあった」。そういう訳だから、大学に「進学しない人だったら、普通科を出るよりずっと就職はよいのは事実なのだ」と断言している。

当時の学卒と高卒、民間企業と公務員、大企業と中小企業の賃金格差等が窺えて興味深い。特集はこのあと「エンジニアへの道」が案内され、最後に「技術家社長ものがたり」として松下幸之助（松下電器産業社長）と赤井三郎（赤井電機社長）が紹介されている。

■理工系学部の増加

理工科ブームに話を戻すと、昭和34、35年度辺りをピークに入試競争率は概して減少傾向に転じた。それは学部の増設、入学募集定員の増員が大きかったからである*19。文部省が「科学技術者教育振興政策」を打ち出して定員増を進めていたのに加え、1960年からは国民所得倍増計画に基づいて、五ヵ年計画で増員数は更に引き上げられた。その一方で、受験に付き物の数学・理科の負担が大きいこともあって、ブームに乗ったヤジウマ志願者が減少したからである。すなわち「理工系学部の志望者層は安定してきたと考えられる」。

高度成長期の理工科ブーム時代に私立大学の多くは理工系への新規参入を考えたであろう。しかし大学や学部の新設・増設には長い準備期間が必要である。そうした準備期を経て、この安定化の時期に、私学でも理工系学部や学科の新設・増設が相次ぐことになる。1962年4月だけでも、東北学院・上智・成蹊・玉川・東京理科・福岡の6大学に理工系の新学部が発足している。九州の大学にも理工系ブームが押し寄せつつあったのである。

4 九州産業大学の誕生

■創立者中村治四郎の前半生

九州産業大学の前身九州商科大学の創立者中村治四郎（1907～1974）の生地は、福岡県嘉穂郡幸袋町日尾、いわゆる筑豊炭田の真々中である。実家は代々の庄屋で幼少期の回想には、石炭王と言われた伊藤伝右衛門や、筑豊御三家の一つ麻生太吉の名が出て来る*20。とは言え家産は既に傾いていた。加うるに父を亡くし、母の再婚先である鞍手郡木屋瀬町に移り、鞍手中学に進む。小学校から13人受験して彼一人だけ合格したと言うから出来は良かったのだろう。さらに大阪外国語学校教員養成所に進んで教員免許を取り、1927年に小倉中学に赴任している。この年治四郎は遠賀郡中間村の中村家に婿養子に入り、実家の山本姓改め中村を名乗ることになる。養父中村磯吉は小学校校長として人々に慕われ、中間市には巨大な記念碑が建てられている*21。

向上心に富む治四郎は在職7年で教諭を辞め、広島文理科大学に行って英語の研鑽を積んだ。卒業後は福岡に戻って、37年から小倉商業学校、40年から東筑中学（当時遠賀郡折尾町、現北九州市八幡西区）で教鞭を執っていた時に*22、日本の敗戦＝終戦を迎えたのである。

■教育事業家へのスタートアップ

敗戦日本で連合国軍総司令部（GHQ）の占領政策が開始されたが、中村は福岡県庁外務課

に頼まれて通訳事務嘱託として英語の翻訳や通訳に従事する*23。そこでこれからは「英語の時代」「英語教育の時代」が来ると確信したのだろう。翻訳室の同僚の証言によれば、「中村先生は絶えず中座して居なくなる。……県庁内を隈なく歩き廻っていたのである。教育関係から、国有財産のことから、色々なことを調べておられることが次第に判ってきた。……これからの日本は教育がしっかりしなくてはいけない。わし〔中村〕は自分の理念に合う学校を作ろうと思っている。……〔あなたもいっしょに〕来てくれぬか」*24とされている。

また資金の相談を受けた炭坑主が言う。「私が感心したのは学校敷地として今の平和台、当時の城内練兵場の広大な土地を財務局*25や文部省などをどのように説得したのか、またどのような折衝をしたのか、とにかく借り受けてきたことである。まことに天晴れな事業家ぶりというほかない」*26。その時点で「机、椅子など五、六百脚既に持っているという。これは戦時中雑餉隈（ざっしょのくま）渡辺鉄工所*27の青年学校につかっていたのが不用になっていたので払下げてもらって安く買って準備しているという機敏さと周到さに驚いた」。

中村自身は、創立の動機と立地事情について次のように語っている。

私の養父は生粋の教育者で……三代に亘って、郷里の人の教育に一貫し、晩年には……町の郷社に立派な清徳記念碑を立てて貰った。そんな関係で、養嗣子である私もそれに劣らぬ何か意義ある教育的業績を念願するに至った。今一つは、私の実父は日露戦争当時、舞鶴城内にあった歩兵第二十四連隊から模範兵として出征しているし、私もまた、護国神社建設当時、勤労奉仕をした思い出もあった。そんなことから、この地で何か教育的に意義ある仕事をしたいと思うに至ったことも事実だろう*28。

かくて1946年3月、福岡外国語学校が発足する。場所は「この地」大名町大手門無番地、福岡城の一角、平和台陸上競技場の西、現在「牡丹芍薬園」となっている所である*29。志願者1600名中400名を合格とした入学試験*30が行なわれたのは6月になったとは言え、終戦から1年足らず、驚くべきペースである。

■福岡外国語学校から福岡外事専門学校へ

その年の内に中村は専門学校への昇格運動を開始した。福岡外事専門学校設立趣意書*31は言う（原文は旧漢字とカタカナ）。

連合軍の進駐により米英語を始め外国語の必要性は急激に増加せり 而して将来益々外国人の往来頻繁となり……日本再建のため外国語を通して外国文化を摂取するの要は益々大となるべく高度の外国語教授の必要性は愈々緊急なるものあり 茲に外事専門学校の設立を發意し以て現在及将来の社会の要請に応え新興日本建設に貢献する所あらんとす

これに続いて、「福岡市の将来」について前途洋々、期して待つべきものがあり、「福岡市周辺事情」について人口稠密、交通至便、教育においても学校は多いが、入学希望者も多く、加えて復員学徒も殺到していることから「入学難緩和の要」があると説く。市内の高等教育機関は「僅かに九州帝大の外福岡高校、経専、農専及西南学院あるのみにして受入体制の不備なる誠に憂慮に堪えざるもの」がある。これらの諸事情から中村は福岡市に外国語学校の設立を企て、

取り敢えず県認可の下に福岡外国語学校として発足し内容整備に努力しつつある実情なり
然るに実に伴うに名を以てし内容に配するに形式を以てするは又必然且当然にして専門
学校令による学校として認可を申請する所以なり 財団法人福岡外国語学園理事長 中村
治四郎

かくて翌1947年4月、修業年限3年、定員1学年250名の福岡外事専門学校が設立された。時勢や出会いがあったとは言え、中村はインテリには珍しい決断と実行の人である。それも単なる「起業」家でなく、その後の展開が物語るように、ゴーイング・コンサーンを担った歴とした企業家である。戦後の教育界において、教育者が私立学校を創立し発展させ、一大教育産業コンツェルンを築いた事例がいくつかあるが、地方また中堅ながら中村治四郎もその一人と言える*³²。

■福岡外事専門学校から福岡商科大学へ

認可申請書に、福岡外事専門学校設立の「目的」は、「実際のな外国語に習熟させ併せて政治経済文化各部門に亘る基礎的知識を授け高邁闊達且有為の人材を育成す」ることとあるように、中村が目指したのは単なる英会話学校ではなかった。教養教育にも意を注ぎ、専門学校としての内実を整え、1949年3月には最初の卒業生（213名）を送り出したが、卒業生は教員資格も得ることが出来たので英語教師が輩出したと言う。これには当時は学制の混乱期で、生徒中に優秀な学徒兵や士官学校や兵学校出の復員者が多かったという事情もあるかも知れない。細かい教学事情は省くが、結局全3回の卒業式で総計742名（最終回の第二部48名を含む）の卒業生を出して、外専は発展的に解消する。

さて敗戦によって戦前の皇国史観的教育は否定され、戦後のGHQ主導の学制改革は1947年に教育基本法として公布された。これによって旧来の私立専門学校は、廃校するか、或いは教育内容を再編して新制の高等学校に「格下げ」するか、それとも「格上げ」して新制の四年制大学になるか、それが無理なら短期大学になるか等の去就を迫られたのである。中村の性向からして外専を更に大学に昇格させたいと考えるのは当然であるが、如何せん、敷地・教室・図

書館・設備等々について、単独で大学設置基準を満たすことは出来なかった。

当時福岡県下には小倉市、八幡市、福岡市、久留米市などに公私の専門学校があったが、どの専門学校も同様の事情を抱えていた。そこで考えられたのは公立大学化の模索や私学合併による大学昇格である。各校で色んな組み合わせが検討され交渉され、また議論も紛糾したようであるが^{*33}、昇格の申請にはタイムリミットがあった。

文部省からの示唆もあって、結局福岡外事専門学校は、郊外の七隈（現城南区）にある福岡経済専門学校^{*34}と合併することになった。1948年7月の期限ぎりぎりに「福岡商科大学設置認可申請書」が提出され^{*35}、年末に現地視察と審査を受け、翌49年3月末に認可指令が届き、4月に開学するという慌しさであった。初代学長には経専校長花田大五郎が就任し、中村は副学長^{*36}に就任した。

「西日本ただ一つ」の福岡商科大学は旧両校の「対等」合併ということであったが、忽々に結ばれた合意は大雑把で、大学がスタートしてみると、語学教育と商業教育にかける理念の相違、外専財団と経専財団の評価や運営方針などの違いは大きかった。程なく両者の姿勢と路線の違いが表面化し、理事会でも対立するようになった^{*37}。そしてついに2年目の途中で（50年12月）中村は副学長を辞任する^{*38}。「財団法人福岡外国語学園は……昭和26年〔1951年〕3月14日を以て解散し……本財団に属する残余財産は一切これを学校法人福岡大学へ寄付する」^{*39}。

中村辞職の後、福岡商科大学は法経学部の増設を手始めに順調に総合大学への道を歩み、56年には福岡大学と名を改めて、現在西日本最大のマンモス私大に発展している^{*40}。

■雌伏十年、「九州英数学館」時代

中村は根からの教育者であり、福商大を去った後も教育への情熱熱しがたく、1951年（昭和26年）大学受験予備校「九州英数学館」^{*41}を、平和台から遠からぬ長浜に設立する。福岡市内最大の繁華街である天神の、西鉄グランドホテルから長浜公園に向かう通りは通称「親不孝通」と呼ばれていたが、それは突当りに九州英数学館の他にも水城学園という地場大手の予備校があって、この通りが親泣かせの浪人生や受験生で溢れていたからである。

1950年代はあたかも産業復興、経済発展の時代、全国各地に大学が設置され、進学率は上昇し、そのため予備校にも受験生が押し掛けていた。しかし中村は単なる受験テクニック教育を越えるものを目指した。学館は座禅を取り入れたり、寮を完備するなどして「人づくり」にも意を注ぎ、「全国でも初めて」異色の「予備校として学校法人の認可を受けた」。最盛期には実に在籍三千人を越えたと言うが^{*42}、「地元九州大学はいつも合格定員の二、三割という圧倒的多数を年々固く守って譲らず」^{*43}、学館生は並みの大学生よりも胸を張っていたとは、今

て語り草となっている。

しかし高度成長期が過ぎると予備校の環境も変化してくる。大学の増加と少子化の進行は受験競争を緩和させることになる。加えて80年代から中央の大手予備校の全国展開が進められ、地方の中小予備校の経営は苦しい局面に入った。特に94年に駿台福岡校が直近の舞鶴に立地したことによる打撃は大きく、98年には水城学園が閉校し、翌99年には英数学館も大学受験科を閉鎖して、現在は国際言語学院として外国から来た留学生に「準備教育課程」を教授している。

■九州商科大学の設立

1950年代の予備校経営で成功した中村英数学園理事長・中村治四郎は、その資金を元に、福岡市に合併されて間もない東の端、福岡市大字唐原字琵琶橋287番地に土地を得て、宿願の大学経営に乗り出す。「趣意書」にいわく、「福岡県が日本の商工鉅業の主要な地帯であり……加えて……商工業文化の面における重責は大なるものとなり……育英機関としては福岡大学及び西南大学に併設される商学部のみにて……業界の需要に応えることは不可能の状態にあり……ここに於いてこの進学希望者の途を開き愈々進展の途にある地元の商業経済面はもとより日本経済への寄与を意図し、この地に九州商科大学を設立せんとするものであります。幸いにして当学園に於いて現在経営する九州英数学館は、学生二千名を有し……西日本随一を誇るもので……既に大学教養学部の陣容は一応整えており……関連深いものであります」*44。

■九州産業大学への発展

設置は認可され、九州商科大学は1960年4月に開学した。大学は時勢に乗って発展し、早くも3年後には工学部を増設して、これを機に九州産業大学と改名する。改名に際してはいくつかの選択肢があったと考えられるが、工学部増設ということから産業大学とするのは自然な着想と思われる。既に見たように、時流に乗って商業科・工業科を包括する産業高校が全国的に誕生していたからである。産業大学第1号のPR効果も念頭にあっただろう。

「私立大学が工学部を開設することは、難事中の難事であって……少なくとも四、五年を要するといわれている」。しかし二学部六学科を有する権威ある総合大学としての態勢を整えることができた。単科大学として開学後僅か三年にして素晴らしい大発展をなしたことは、「日本の教育史上にも例がないことと思う」*45。

順風満帆、得意満面と言うところだが、中村の頭の隅には、前年に工学部を増設した因縁のライバル福岡大学のことがあったに違いない。それにしても急成長であることは確かであり、1960年代の「10年で入学定員〔が〕10倍に」という、正に高度経済成長時代の産業化の申

し子とも言うべき大学であった^{*46}。

校名について中村は言う。「九州産業大学なる校名は日本に唯一つの特色ある校名であって、商学部、工学部を通じて近代日本の産業の発展と近代化に貢献せんとするものである。本学は産業界に直結し、その中核をなす有為な人物養成を念願するものである」。

大学は創立以来一貫して中村の言う「産学一如の大理想」のもと、「卓然自立」を校訓として発展し、現在は7学部1万有余名の学生を擁して、九州では福岡大学に次ぐマンモス大学となっている。

しかし時代はグローバル・ネットワークの時代、今有卦に入っているのは国際、情報、地域、政策、或いは少子高齢化に対応した看護やサービスなどに関わる大学であり学部であることから、これまで大量生産・大量販売・大量消費体制を疑いなき大前提としてきた産業大学は、産業の本義と自らのアイデンティティを省察すべきときにあるとも言える。

本稿は元々「産学一如」理念の検討を期して起こしたものであるが、その前段階の産業大学の誕生事情にスペースを取り過ぎてしまった。中村治四郎の建学理念が生み出された歴史的情況と現代的意義についての検討は稿を改めることにする。

〔註〕

- 1 『サンダイ広報』第86号、九州産業大学庶務課、1987年10月、3頁。
- 2 資本主義経済の制度的或いは合理主義的解釈として成立した経済「学」に並ぶような経営「学」は、との括弧付きの説明を加えるのがいいかも知れない。
- 3 1943年10月に「教育二関スル戦時非常措置方策」が閣議決定されたが、これは「理科系大学及専門学校ハ之ヲ整備拡充スルト共ニ、文科系大学及専門学校ノ理科系ヘノ転換を図ル」もので、翌44年には一挙に283校の工業学校が新設されたが、その9割近くが商業学校からの転換校であった。大学では東京商科大学が東京産業大学に、神戸商業大学が神戸経済大学に名称を変更した。但し、大阪市立の大阪商科大学は名称を変えなかった。三好信浩『日本の産業教育——歴史からの展望——』名古屋大学出版会、2016年、103、255頁以下参照。
- 4 同上書、331頁。
- 5 2009年前後から、大学入学希望者の総数が入学定員総数を下回るようになった状況を言うので、個々の大学によって事情が違うのは当然である。
- 6 詳しくは拙著、木元富夫『産業化の歴史と景観』晃洋書房、2004年、8頁以下参照。
- 7 英語表記の多くは institute of technology だが、日本のモノ作りの一大拠点愛知県にある3大学の表記は面白い。愛知工業大学は Aichi Institute of Technology、愛知工科大学は Aichi University of Technology、豊田工業大学は Toyota Technological Institute となっている。なお愛知産業大学は本文中に記したように Aichi Sangyo University である。因みに、工業大学のトップとされる東京工業大学の英語名称は戦前は Tokyo University of Engineering であったが、戦後に Tokyo Institute of Technology に変更されている。
- 8 従ってこれらは現在存在し活動している大学であって、過去に廃校や改名をした元・産業大学は含まれてい

ない。また現ウェブサイト上の説明が、創立時の説明と同一であるとは限らない。

- 9 「産業能率」は大正時代に使われた用語で、「科学的管理」の言い換えである。1922年協調会の中に産業能率研究所が設置されたが、震災後に閉鎖されることになり、所長をしていた上野が事業を引き継ぐ形で25年に日本産業能率研究所を創立した。なおテイラー『科学的管理法』（1911年）は、日本では『学理的事業管理法』（星野行則訳、1913年）として初翻訳・出版されている。日本能率協会 HP 参照。
- 10 公立大学と公立大学法人の違いは何か。本学 HP の説明によれば、「県や市などの地方公共団体が、直接設置し運営する大学が公立大学です。地方公共団体が大学の設置や運営を行わせるために設立する地方独立行政法人が、公立大学法人です」。
- 11 産業教育とは、「産業従事者にとって必要な知識、技能、態度の習得を目的とする教育。戦前には実業教育と呼ばれていた。また職業教育とはほぼ同義。その振興をはかるため1951年産業教育振興法が制定された」。『ブリタニカ国際大百科事典、小項目電子辞書版』2004年。なお三好信浩、前掲書は、著者長年の産業教育史研究を集約したものである。
- 12 前掲拙著、116頁参照。筆者が中学卒業時に受験した明石工業高等専門学校のウェブサイトを見ると次のような説明がある。「昭和37年4月1日、国立学校設置法の一部を改正する法律により、最初の国立工業高等専門学校12校の一つとして設置される。機械工学科、電気工学科及び土木工学科の3学科（3学級）が置かれた。神戸大学（神戸市灘区六甲台）に仮事務所を置き創設事務を開始。同月23日、仮校舎において開校式及び第1回入学式を挙げる」。また筆者の高校卒業時には、クラスの秀才二人は超難関大学の船舶工学科と原子核工学科に行ったと記憶している。
- 13 当時「翔陽」が流行したようで、ほかにも北海道（2001）、東京都（2005）、埼玉県（2005）、滋賀県（1998）、熊本県（1996）などにも翔陽高校がある。因みに埼玉県立戸田翔陽高校 HP の説明では、「『志』を持ち、『夢』・『希望』の象徴である太陽に向かい飛翔していくという、目標実現のイメージを『翔陽』という言葉に込めた」とのこと。
- 14 『高校時代』（旺文社）1959年7月号、239頁。同校生徒（2年生）の投稿記事による。「今年の四月一日から〔校名が産業高校に〕になりました。……全国に四校しかない……産業高等学校という学校をもっとふやしてもよいと思います。これからの日本の産業発展のためにも、すこしずつ役に立っていきと思います」とある。なお三好信浩、前掲書、第9章には、戦前の中等産業教育の先進地域として「工業教育の先進地福岡県」、「商業教育の先進地兵庫県」、「総合的に見た先進地愛知県」が挙げられているが、戦後も兵庫県に産業高校が多いように思われるのはその流れだろうか。
- 15 因みに倉吉市の高校事情を調べると、戦後の学制改革や高校三原則（小学区制・総合制・男女共学）による旧制中等学校の再編で1949年倉吉高校が設立されたが、校舎は東校舎と西校舎に分かれた。後にそれぞれが53年に倉吉東高校、倉吉西高校になった。このような事例は全国各地に見られ、名門高校の歴史の本流は何処にあるかの系譜を争う悲喜劇を生んでいる。
- 16 1950年代から60年代にかけて電波高校、電波工業高校の設置が相次いだが、70年前後から環境が変化して国立も私学も全て再編され改名している。因みに九州産業大学の隣駅にある福岡工業大学の附属高校も、元は1958年に福岡電波高校として開学したのが十年経たないうちに経営破綻して、その後附属高等学校に改名している。なお同校 HP に「沿革」欄は見当たらない。
- 17 下谷政弘『経済学用語考』日本経済評論社、2014年、第4章で「重化学工業という合成語」の産業論的考察が行なわれている。戦前は工業は「軽工業、重工業、化学工業」に三大別されていたが、戦後になって「重工業・化学工業」「重工業及化学工業」という言い方が生まれ、さらに「重・化学工業」を経て「重化学工業」なる用語が誕生している。
- 18 前掲『高校時代』104頁以下。
- 19 『大学進学コース』（学習研究社）1962年9月号、150頁以下参照。
- 20 『〔中村産業〕学園十五年史』中村産業学園、1968年、151頁、『中村治四郎の肖像』九州中村高等学園、1998

年, 150頁。

- ²¹ 「中村磯吉先生清徳碑」は基壇を含めれば5メートルを越すかと思われる大きなもので、惣社宮の脇参道入口横の小公園(中間市中尾1-3)にある。建設された昭和初期と現在では、周囲の地勢は変っているが、石碑の場所は当初のままのようである。小公園には元は小池があったと言うが、盛り土で整地された今も水捌けはよくなさそうである。そのためだけではないが、石碑の土台部に風化や剥離が見られ、倒壊の危険防止のためか周囲に柵が張り巡らされており、昔の写真のままではない。記念碑が何故この場所に建てられたかであるが、関係者が殆んど存命せず、惣社宮の宮司も代替わりして資料も残っていないということで、詳細は分からない。小伝に中村家の菩提寺は明願寺とあり、明願寺と惣社宮との距離は数百メートルなので、何れにせよ自宅の近くに建てられたということではないか。なお、「明治の足音が聞こえるまち」中間は、治四郎が生まれた飯塚と同じく炭鉱で栄えた町で、記念碑の建設が資金不足から頓挫していたのを、「そんなことでは失礼である。われわれの力で建てよう」と完成させたのは、中村磯吉の教え子の炭鉱企業家、木曾重義(当時炭鉱請負人、県議、後に木曾鉱業、中興工業社長)であったし、戦後は炭鉱を舞台としたサークル活動の会誌「サークル村」が創刊された拠点も、惣社宮の近くにあった。同上書「十五年史」23, 25頁、「肖像」14頁、杉尾政博『石炭一代 木曾重義』西日本新聞社、1979年、巻末略年譜参照。
- ²² 英語担当だったが時局柄、英語が無用視されてくるにつれ、中村は素養を生かして博物学も講義した。その時間に高倉健(後に俳優)が校庭の桜の枝を折ってきたので叱ったという。前掲「肖像」23頁。
- ²³ 『福岡城(新修福岡市史・特別編)』福岡市、2013年、208頁以下参照。
- ²⁴ 前掲「肖像」21~22頁。
- ²⁵ 前掲「十五年史」155頁の中村の記述では「北九州管財局(現在の北九州財務局)」とあるが、前掲「福岡城」208頁には、「土地・建物の払い下げを熊本財務局長宛に申請した」とある。1948年末に熊本財務局が分割されて新たに福岡財務局が設置されているが、そういう時期のことである。
- ²⁶ 前掲「十五年史」29頁。
- ²⁷ 九州産業考古学会編『福岡の近代化遺産』弦書房、2008年、41頁参照。
- ²⁸ 前掲「十五年史」154~155頁。
- ²⁹ 前掲「福岡城」204頁。
- ³⁰ 前掲「十五年史」29頁。
- ³¹ 『福岡大学75年の歩み 資料編』福岡大学、2013年、147頁以下。福岡外事専門学校の認可申請書も、次の福岡商科大学の設置認可申請書も、根本資料を「〔中村産業〕学園十五年史」に見ることが出来ず、福岡大学の大学史資料集に残され公開されているのは遺憾である。
- ³² 中村治四郎と並んで、同時代に生まれた福原軍造(1902~88)、古岡秀人(1908~94)の3人を、筑豊に生まれた三大教育事業家に数えたい。鞍手郡西川村生まれの福原は、九州女子大や九州共立大学を擁する福原学園の設立者、遠賀郡水巻村生まれの古岡は学習研究社(学研)の創業者で、両者は共に小倉師範学校を卒業して小学校教師となったが、後に教師をやめ、戦後になって福原は北九州で教育事業を、古岡は東京で教育出版事業を開始して何れも大成した。『福原学園三十周年記念誌』福原学園、1977年、岡本文良『望洋 古岡秀人伝』学習研究社、1994年、参照。なお、教育コンツェルンとして福岡県では、福岡第一高校や日本経済大学を有する都築学園グループも挙げることが出来る。見方によってはその規模は日本大学や東海大学に次ぐとも言われるが、建学の理想が今に生きているかと言えば、学園は今や投資機関化して問題ありとされている。グループ内に「評価・再生委員会」が設置されているようだが。また福岡市内に中村学園大学のほか短期大学や専門学校を擁する中村学園があるが、その「創立者である学園祖 中村ハル」(1884~1971)は現早良区西新の生まれで、治四郎と関係はない。中村治四郎夫人が奇しくも同姓同名なので誤解され易い。『ハル先生』中村学園、2008年、参照。
- ³³ 「福岡大学大学史資料集」の「教授会記録」「福岡商科大学移行記録」には詳しいメモが残されているようだが、遺憾ながら筆者はまだ見ていない。

- ³⁴ 経専は、戦前の1934年（昭和9年）に、福岡市の協力も得て、福岡高等商業学校として福岡市内で開校し、翌年七隈に移転した。なお前註3で述べたように、43年東条内閣が閣議決定した「教育に関する戦時非常措置方策」に基づいて、専門学校の改名、改組、転換、統合が全国的に進められたが、福岡では協議の末44年に、この福岡高等商業学校が北九州の戸畑にあった九州専門学校と統合され九州経済専門学校となった。校長には花田大五郎（朝倉郡出身、朝日新聞社を経て教育界に転身、当時和歌山経済専門学校長兼和歌山工業専門学校長）が就任した。それが戦後になって九州専門学校との誤認・混同を避けるためもあって、福岡経済専門学校に改称した。なお九州専門学校は、戦中期に強いられた統合を戦後になって解消し、八幡専門学校、八幡大学と名を変えて、現在九州国際大学となっている。福岡大学は一時九国大とも深い関わりがあったことになる。前掲「福大、資料編」参照。
- ³⁵ 同上書、194頁以下、前掲「十五年史」39頁以下参照。
- ³⁶ 副学長が正式の職名かどうか疑問が残る。認可申請書の職名にないし（学長はある）、教員配置表でも中村がナンバーワンの扱いを受けているようには見えない。後註38参照。
- ³⁷ この対立は、東京商科大学の誕生期を彷彿させる。大学の前身である東京商業学校（当初商法講習所として私塾、後に農商務省所轄、文部省移管）は、東京外国語学校内に付設された高等商業学校（文部省所轄）と合併して1885年に成立したが、互いに相手を「書生派」「商人風」「前垂風」と批判し合って紛議が絶えなかったという。この「一橋に流るる二つの潮流」は、後の東京高等商業学校と東京帝国大学（法科大学商業学科）との確執にも窺われる。幾多の反発や牽制を克服して、東京高商が、官立単科大学第1号たる東京商科大学としてやっと発足したのは1920年である。三好信浩、前掲書、219頁以下参照。
- ³⁸ 詳しい経緯は「十五年史」には明らかでない。福岡大学の資料によるしかないが、前掲「福大、写真・年表編」185頁、『福岡大学の歩み 事典編』福岡大学、2014年、16頁（人名解説）にも中村辞任の記載がないのは遺憾である。因みに前掲「福大、資料編」305頁には「学長並に教員予定」が収録されている。そこに学長予定者の名はあるが副学長の欄はない。また一般教養科目「英語」担任の「講師」として中村治四郎の名があるが、「一年程講師を適当とせん資料やや不十分」とある（但し最終的には、貿易学科「外書購読」「教授」で決着したもよう）。スタートするのが商科大学とは言え、このような扱いは中村には不本意なことではなかったか。なお福岡大学に残されている教授会議事録には詳しい遣り取りが記載され、「学長花田、副学長中村、互いにおかさず訓育に対し同一権限を持つ」（1949年7月28日）の如き生々しいメモも残されているが、その検討は又の機会にしたい。
- ³⁹ 前掲「福大、資料編」179頁以下。外専には附属大濠中学校があったが、これはそのまま商科大学の附属中学となっていた。今日これが福岡大学附属大濠高校となっているのは、かかる財産処分の結果である。
- ⁴⁰ 福岡大学の教育文化史的、産業遺産的観点からの評価については、九州産業考古学会編、前掲書、98頁参照。
- ⁴¹ 「英数学館」は福岡市大名に発足した、大正以来の「西日本最古の伝統と歴史ある受験専門学舎」であったが、戦時下から休校状態であった。その名を中村が譲り受け、九州を冠して「九州英数学館」としたようである。前掲「十五年史」50頁、前掲「福岡城」221頁参照。
- ⁴² 筑豊出身の著名なシンガーソングライターは、かつて熱心に通った生徒の一人らしいが、のみならず有名無名多士済々が通過していったことだろう。
- ⁴³ 前掲「十五年史」51頁以下参照。
- ⁴⁴ 同上書、63頁、『中村産業学園40年史』中村産業学園、2001年、60頁、『九州産業大学50年史』中村産業学園、2011年、54頁。なお後二書を資料性の観点から見ると、九産大に至るまでの「前史」については「十五年史」を越えるものが殆んどなく、大学発足後の「本史」については重複した記事が多いのは残念である。
- ⁴⁵ 同上書「十五年史」71頁、「40年史」72頁、「50年史」64頁。
- ⁴⁶ この10年間に学部は1学部1学科から5学部14学科に、入学定員は120人から1130人に、在籍者数は268人から7777人に増加した。同上書「50年史」78頁。なお産業大学誕生の歴史的意義の考察は、前掲拙著、116頁を参照されたい。